

地域生活応援誌 わたし・子ども・障害者・高齢者・あなた

Juntos

【ふんとす】

「Juntos=フントス」はスペイン語で「一緒に」という意味です



隔月偶数月発行

Vol.

71

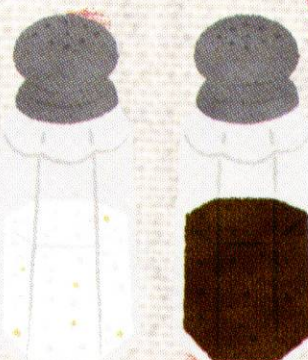
2013
Apr.

定価
600円

特集

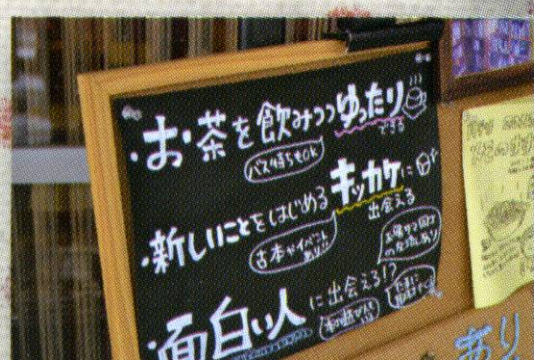
まちを元気にする！ カフェ特集

- From Earth Cafe 'Ohana' (東京都)
- 亘理いちごっこ (宮城県)
- 桜舎かふえ (山形県)
- かふえかじ川 (新潟県)
- まちカフェりんく (新潟県)
- Café Quône (宮城県)



好評連載

- 人生・暮らしを豊かに ◆ Co-co Life編集部 (東京都)
- 田舎暮らし&子育てマンガ ぽっちり通信 [15] かわむらけいこ
- 地域人たちの理 [5] 酒井 保
- とともに暮らすためのレッスン [8] 安井愛美
- 視点・福島発 [6] 齊藤康則
- 被災地から避難してきた人への支援 [7] (福岡県)
- 社協のお仕事—コミュニティソーシャルワーカーは拓く [25] 勝部麗子



ポジティブな 気持ちで外出しよう!

障がいのある女性たちがつくる ファッション誌

ココ ライフ
Co-Co Life編集部
《東京都》

外出する楽しさを発信!

障がいのある女性が、障がいのある女性のために作成したファッション誌——。そんな新聞記事を目にして、このファッション誌を発行する東京都中野区の特定非営利活動法人^{せむい}施無畏を訪ねた。

特定非営利活動法人施無畏は、もともと福祉機器のレンタルを行う事業所だった。介護用のベッドを搬入する際などに自宅を訪ねると、そこに住む障がいのある人は、家と病院との往復以外に外出する機会が少ないと感じたという。外出したいと思う気持ちをあと押しするような、楽しいことや、わくわくする

ことをつくりだせないか。そ

こから、ファッション誌

「Co-Co Life☆女子部」



年4回発行のファッション誌
「Co-Co Life☆女子部」
(B5判、創刊号は16頁、2号は24頁)

づくりがスタートした。

「Co-Co Life☆女子部」の前身雑誌は1冊500円で、書店などを通じて販売していた。約3年で13号まで発刊したが、「手にとってもらうことを優先したい」という思いから、2012年秋にフリーペーパーとして再出発した。タウン誌・フリーペーパーの祭典「ARUNOアワード2012」(後援:経済産業省)で新人賞を受賞するなど、その完成度の高さは折り紙つきだ。現在は年4回、1万部を発行し、リハビリセンターや病院、学校、障害者センターなどに設置・配布している。

夢が叶ってモデルに

「Co-Co Life☆女子部」を編集しているのは、障がいのあるボランティアスタッフの女性たち。編集スタッフの一人、渡部あきこさんは、中学生のときの病気の後遺症で、両下肢に機能障がいがある。もともと華やかな世界に憧れていた渡部さんの将来の夢は、「パタンナーやヘアメイク、モデル」など、ファッションに関する仕事。障がいのために一度は夢をあきらめたが、大学でも被服行動について勉強するなど、ファッション業界への思いはもち続けていた。大学を卒業し、企業に就職する傍ら、「歩かなければ自分の障がいはわからないのではないか」という思いから、インターネットで検索をすると、「Co-Co Life」の読者モデルの募集を見つけた。2008年に読者モデルとして登録が叶ったときには、「小さいころからやりたかった夢が叶ってうれしい反面、本当に大丈夫なのかという不安もあった」という。当時の渡部さんが掲載された雑誌を拝見したが、その輝く笑顔からは不安な思いは感じられない。むしろ、凛とした力強さを感じた。

渡部さんは現在、編集スタッフ・ライターとして「Co-Co Life☆女子部」の発行に携わっている。編集スタッフのほとんどは、渡部さんと同じように読者モデルをしていた女性たちだ。

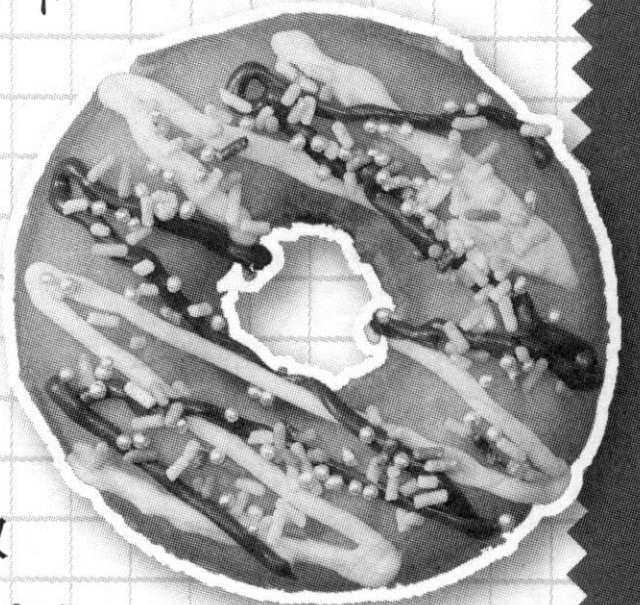
障がいのある女性の目線

気になる「Co-Co Life☆女子部」の中身は、ごくごく普通のファッション誌。表紙のモデ

ル女性はオシャレな着こなしで微笑む。グルメスポットも取り入れた話題の観光地散策は、写真を見ているだけでもわくわくする。ワンポイントのメイクアドバイスや手づくりアクセサリーのコーナーは、思わず熟読してしまう。手づくりスイーツレシピは、彩りだけでなくカロリーや美容にもこだわったうれしいポイント

が満載だ。恋愛についての座談会は、なるほど、と彼女たちのテクニックにうならされっぱなしだ。

その内容は、書店で取り扱っている女性誌と変わらない。ただ一つ、すべての記事が、障がいのある女性の目線で書かれていることを除いては。つまりは、観光地案内は車いすでの移動を前提としているし、ユニバーサル仕様のトイレ情報も掲載している。東京スカイツリーでは、「ほかの展望デッキは車いす目線だと手すりが邪魔になることが多いが、スカイツリーは足元まで全面ガラス張り」など、ならではの視点に大きくうなづく。メイクアドバイスでは、アイメイクをブラシやチップではなく、指を使うことを提案し



プロデューサーの遠藤久憲さん(右)と
編集・ライターの渡部あきこさん

ている。視点を合わせることや指先の力のコントロールが難しくても、ちょっとした工夫でおしゃれが楽しめるというわけだ。

リアリティのある情報

それぞれのコーナーには、当事者の声が掲載されている。Co-Co Lifeプロデューサーで、特定非営利活動法人施無畏の理事である遠藤久憲さんは、「自分はこんな工夫をしている、と発信することで情報にリアリティと広がりが出る」と話す。

一方で、ファッション誌ならではの悩みもある。たとえば衣装。「メーカー側は座って撮影する前提でデザインをしていないので、ラインが崩れると美しく見えない、という理由で商品の貸し出しを嫌がられることもある」という。もちろん、協力的な企業との出会いもある。バックスタイルが印象的なタイツは、メーカーから「車いすではくなら、バックスタイルを前に持ってきたら」というアドバイスを受けたそう。つまり、車いすに座って見える柄は、本来ならばバックスタイル。せっかくのかわいい柄が見えないのはもったいない、女性ならかわいいものを身につけて、見てもらいたい。そんな気持ちが少しの工夫で形になる。

人生を楽しむ工夫とセンスを提案

Co-Co Lifeでは、雑誌を通じてイベント参加者の募集もしている。前述の座談会をとおして声を発信する、というものだけではなく、クッキングやアクセサリーづくりのワー

クショップも開催している。編集部として「読者に接し、つながる機会をつくることで、スタッフの感覚が独り歩きしないように、読者の感覚を、誌面を通じて感じてほしいから」と遠藤さんは言う。そして、「Co-Co Life☆女子部」制作のきっかけとなった「ポジティブな気持ちで外出をしてほしい」というコンセプトに準ずるものでもある。

今後の目標を伺うと、「社会全体としては、バリアフリーという言葉がいない社会をつくること」と遠藤さん。「障がいのある人がもっと外出し、経済活動にも参加し、楽しく生活できるというモデルをCo-Co Lifeから発信できれば」という。「Co-Co Life☆女子部」としては、「エリア版の制作」が目標だ。グルメや美容院、身近なデートコースの提案などは、それぞれの地域に即したものが求められているから。

そのためには財源も必要不可欠だ。現在は自主財源での発行だが、協賛や設置場所は常時募集している。

少しの工夫や光るセンスで、人生はもっと楽しくなる。一冊の雑誌を通じて、そんな高揚感をあらためて感じた。

(Juntos編集部 宇城絵美)

特定非営利活動法人 施無畏 せむい
〒164-0011 東京都中野区中央5-29-11

サンメゾン中野104号室
TEL 03-5385-2596 FAX 03-5385-2597
<http://www.co-co.ne.jp/>

